

# 小児脊髄損傷患者への関わり～チーム医療のあり方を学ぶ～

—Team medical care to the infant spinal cord—

高度救命救急センター：大川やよい 三村敦輝 関昌代 竹村滋子 下村陽子

## 要 旨

小児脊髄損傷患者の看護を経験し、患者の治療効果を上げるために、多くのコメディカルの方々やボランティアの方々と関わることができた。その中で専門的な知識・技術が集まり、ケアの介入ができ、チーム医療の大切さを実感したので報告する。

キーワード：小児、脊髄損傷、チーム医療、

### 1. はじめに

当院、高度救命救急センターでは、年間約 2000 例の救急搬送入院がある。そのうち交通外傷によって搬送されるケースは全体の 38%で、小児の割合は3%である。

救急搬送される患者は、本人の予期せぬ状態で搬送され、精神的・身体的・社会的なストレスは計り知れないものである。

今回、小児交通外傷で、脊髄損傷となった患者を救命しえた症例を経験し、その診療過程において多くのコメディカルの方たちと関わり、そこで経験しえたチーム医療の大切さをここに紹介する。

### 2. 研究方法

#### ① 研究方法

診療録から対象患者の言動・表情・行動・コメディカルの介入を抽出した。

#### ② 研究期間

平成 21 年 7 月 20 日～10 月 4 日

### 3. 倫理的配慮

家族の同意を得た上で、対象患者が特定できないよう配慮した

#### 4. 事例紹介

7歳 男性

交差点内で自動車と接触し、CPAにて蘇生後、当院救急搬送された。

上位頸椎損傷完全麻痺、外傷性くも膜下出血、肝臓・脾臓損傷と診断された。

#### 5. 看護介入

入院直後、第一頸椎損傷完全麻痺に対して、ハローベスト・呼吸器装着、蘇生後の脳保護に対し平温療法施行。

入院当初より呼吸状態悪く、安静度内での呼吸理学療法などリハビリ実施も、無気肺や分泌物の貯留による頻回の SpO<sub>2</sub> 低下と、それに伴う痙攣あり、鎮静下で呼吸管理を行うなど難渋した。

この段階より理学療法士の介入依頼を行った。

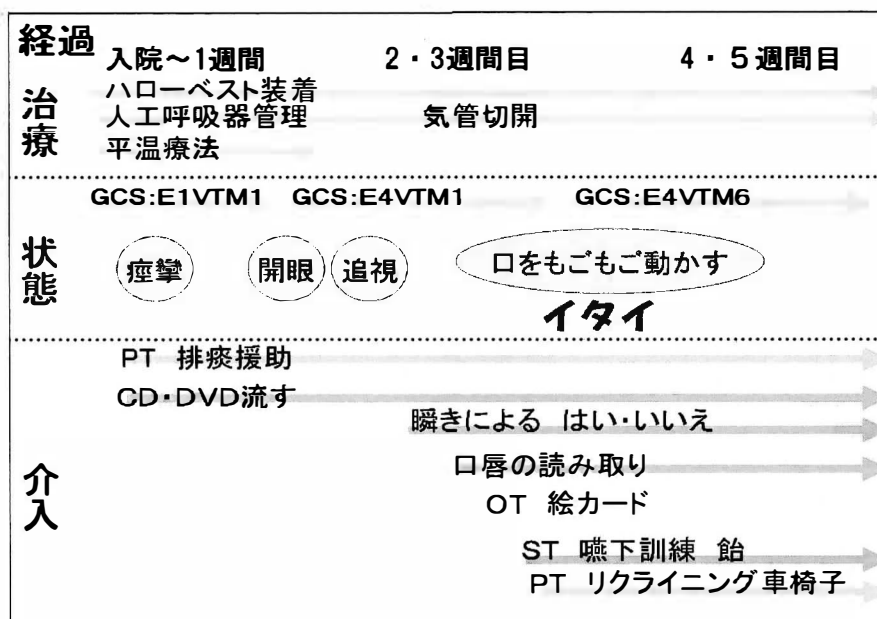
2週目頃より自発開眼見られ、家族が持参したCD・DVDなど終日流し、徐々に声かけに対し瞬き・眼を動かすなど、意識レベルの改善あった。

挿管中より口をもごもご動かす動作みられ、気管切開をきっかけに、【痛い】などの苦痛の訴えができるようになった。

瞬きによる意志表示の確認や、口唇読にてコンタクトを試すようになるが、曖昧なことも多くあり、作業療法士と相談し絵カード導入した。

また、STによる嚥下訓練開始し、キャンディーをなめたり、母親の協力を得て、大好きなココロをシャーベットにして持参してもらい、嚥下は良好だった。

さらに同時期には、呼吸器装着のまま車いすへの移乗を開始した（図1）。



【図1】

入院1ヶ月頃より、円形脱毛・チック・不眠・苦悶様表情や、おなかが痛いなどの症状を訴えることが多くなり、精神的ストレス症状と考え、一日の生活リズムをつけるため、スケジュールを作成した。

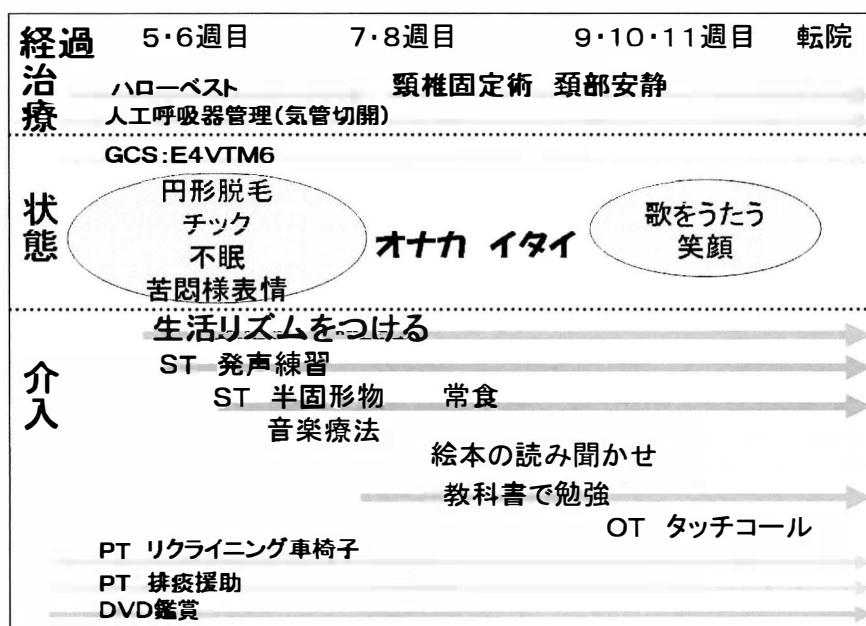
日中は、発声練習、嚥下訓練、車椅子乗車などリハビリを中心に行い、夜間は睡眠薬を使用し、眠るまでそばに付き添い入眠時間の確保を行った。

さらに学童期の発達段階を考慮し、学習と遊びを計画に加え、音楽療法・読み聞かせを取り入れた。音楽療法を開始したところ、母親と共に歌を口ずさんだり、笑顔もみられ、両親と共にリラックスできるような時間を作った。

勉強を促すと興味を示し、看護師と共に勉強をする時間を持つようになったため、院内学級も検討はしたが、長時間の車いす乗車が困難であったことや、人員配置の問題もあり実現しなかった。経口摂取に関しては、ST評価のもと、徐々に食上げでき、本人の嗜好を取り入れたこともあり、順調に進んだ。

手術後は、ネックカラー装着にて数ヶ月の頸部安静必要とされたが、OTとナースコールの方法を検討し、口をあけるとスイッチが押せるようタッチコールを使用できるまでになった。

転院にむけ、車いす乗車時間の目標を決め訓練を行い、入院77日目に無事転院となった(図2)。



【図2】

## 6. 考察

今回、看護師のみならず多くコメディカルの方々と関わり、看護展開を行うことができた。

音楽療法は、当科に入院中の成人患者に実施し、ストレスの軽減に効果があったことや、さらに読み聞かせは、視覚的な刺激などで意識レベルの改善やストレス予防に有効であるとされ、刺激する目的で早期から併用できればよかったと考える。

さらにコミュニケーション面では、患者の訴えを理解することに限界があり、同時期に数種類の方法を導入したことで、患者・看護師双方にストレスをあたえた可能性があり、さらなる意志表示の手段の検討と、スタッフ間の手技の統一が必要であったと感じる。

だが、他職種と同時期に関われたことで、連携をとれたと考える。

また、早期より学童期にみられるストレス症状の出現はあったが、意志表示ができるようになったことで、欲求が満たされストレス軽減につながり、出現回数の減少したのではないかと考える。

## 7. 結語

看護師は、他部門との連携をとるコーディネート役を担い、患者の治療効果をあげるために、多くの専門的な知識・技術が介入することでチーム医療の効果が高まると考える。